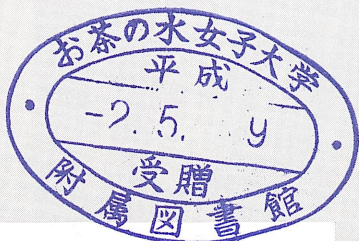


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1990—
6

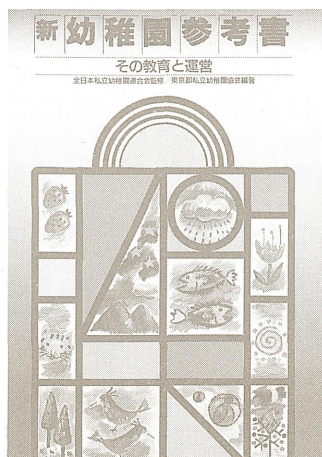
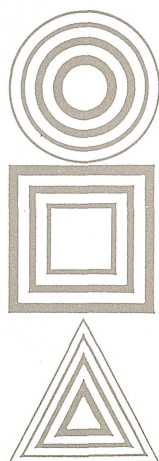


全日本私立幼稚園連合会監修／東京都私立幼稚園協会編著

その教育と運営

新幼稚園教育要領と実践へ 新幼稚園参考書

「幼稚園参考書」が生まれ変わりました。
幼児の自発性を伸ばすには——
遊びの総合性をどう組み立てるか——
新しい教育要領をふまえた
『新幼稚園参考書』は
先生方の強力な助っ人です。



目次より

第一章 幼稚園教育の本質を考える

- 1 幼児が育つことと幼稚園教育
- 2 幼児を理解する
- 3 幼児の生活とは
- 4 教育要領改訂の視点ととらえ方
- 5 幼児教育の内容と方法
- 6 私立幼稚園の特性と存在の意義

第二章 幼児の教育を計画し実践するために

- 1 教育課程・指導計画を考える
- 2 指導計画作成のポイント
- 3 指導計画の実例とその展開
—長期・短期、年齢別、保育形態別

第三章 幼児の生活を考え充実させていくために

—各園の実践例から—主体的生活・
行事・総合性・領域・障害児

第四章 園やクラスをいきいきと運営するために

- 1 園運営の基本的考え方
- 2 クラス運営の実際
- 3 保育の担い手としての保育者

第五章 幼稚園教育の歴史と展望

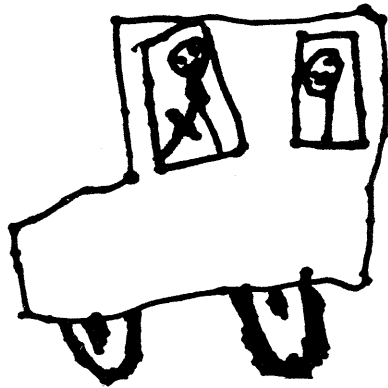
B5判・上製本・436頁

定価4,000円（本体3,883円）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第89卷 第6号

幼 児 の 教 育 目 次

— 第八十九卷 第六号 —

© 1990
日本幼稚園協会

人間の成長における行為の意味(6)

来るものを受けけること……………津守 真……………(4)

心が育つということ その(1)

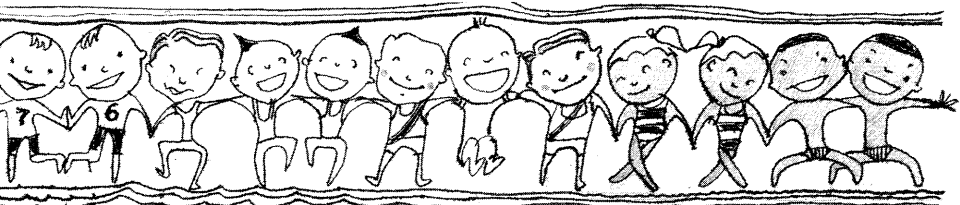
幼児の持つ「内―外」意識の変容をめぐる……………豊田 一秀……………(9)

西ドイツ初夏便り 桜んぼ紀行

桜んぼの村グレッツヒェンベルクを訪ねて……………美谷島いく子……………(15)

園庭より(3)

虫……………松井 とし……………(24)



言語障害の臨床研究ノート(2)

口蓋裂を持つ子どものことは…概説……………村上 敏子…(26)

女性と授乳

タイ国における調査から……………金子 省子…(38)

子どもの成長発達を促すために必要な童具についての考察(1)

西ドイツ製玩具・プレイモビルを利用しての実践研究の報告

……………芸術教育研究所…(46)

若いお母さんたちへ

通信簿をもらって……………榎田二三子…(57)

表紙イラスト・林 健造

扉題字・堀合 文子

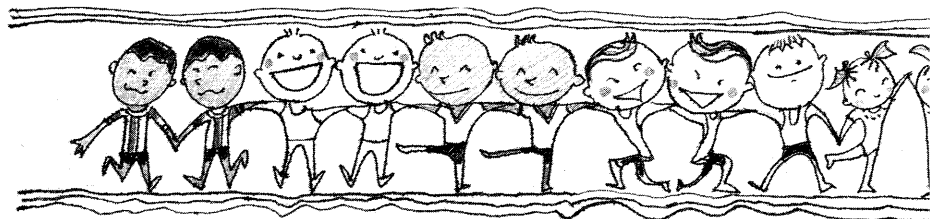
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子

豊田 一秀・上坂元絵里

編集部・大沢 啓子



来るものを受けること

津守 真

「される」ことに敏感な子ども

向こうから来るものをどう受けるか、受ける仕方は子どもによっていろいろである。ある子どもは、さわられたり、話しかけられたり、何かをされることに対して敏感に感じ、恐れたり拒否したりする。このことは、何年間にもわたる保育の中で、次第に形をかえ、変化し成長してゆく。

三歳のK男は、ぬれたパンツや汚れた衣服を着替えさせようとすると、大声でわめき、力一杯あばれて衣服を脱がされるのをいやがった。はじめのうちは私共も暴れる手足をおさえてぬがそうと試みたこともあったが、身体にふられることに人並み以上に敏感な子

どもであることに気づき、無理をしないようにしてきた。

いまK男は八歳である。先日、朝、私に出会ったK男は、私を水道につれてゆき、たらいに水をいれて私にかけた。私が逃げまわると庭の端まで追いかけてきた。そして私を更衣室につれてゆき、「パンツぬいで」といって私のズボンをはきかえさせた。それで私も、ズボンを着替えさせるために、K男は私に水をかけたのだと納得した。こんなことが何日もつづいている。私が逃げるとタオルに水をつけて追いかけてくることもある。私は小さいときのK男のように、大声を出していやがったりしながら、更衣室にいつて着替える。K男の明るい笑顔とやりとりする朝のひとときは楽しい。

K男は小さいときに大人から受動的にされたことを、いま、大人との間の能動的な遊びにかえている。

K男は身体にふれられることに敏感であるし、また、人から見られることにも敏感である。朝、門から入ってくるるときも、慎重に中を見て、人から見られないように木の繁みに走りこんでから、そろそろと皆の中に入ってくるのが常だった。この頃でも、新しい実習生がいると、先生の後ろにかくれてしまう。

K男は追いかけてごっこが大好きである。つかまえられるように滑り台の階段を走って上り、斜面から滑り下りる。追いかけてくれというように笑いながら大人の顔を見る。ときどきわざとつかまえられるでぶざけ合う。かつては追いかけてごっこつかまえられることが恐怖だったK男は、いまそのことを能動的な遊びに転換している。

身体をつかまえられること、他人が見られることなど、自分が他人から何かをされることに敏感な子どもに対しては、近寄り、視線を向け、話しかけるのにも、控え目にしないと、その子から拒否されてしまう。むしろ、子どもがプライドをもって自分からすること多くしていくうちに、自分が恐れていたことに対しても積極的に関心を向けていく力をつけていくのではないか。そして、つかまえられ、見られることをも遊びとして楽しむようになる。そのときには、自分が他人からつかまえられることが、同時に他人をつかまえることになり、見られることが見ることになるといふ、受動と能動が相互に交換される行為が保育者との間につくられている。

来るものを受けることによって大人の世界はひろがる

大人にとっても、自分が思っていなかったできごとに出会う。つまり、何かをされるという受身の立場におかれるとき、その他者を拒否し、防衛的になることがある。そのようなときは狭い自分の枠を守り、人間的成長を阻まれる。受身の立場におかれたときは、自分とは異なる他者にふれる可能性の中にいる。その他者があるがままに受けとめることによって、自分がひろげられ、変化し、成長する。自己実現とは、自分が能動的に何事かを実現するだけでなく、「られる」受動的立場におかれて、それに能動的に立ち向かい、それによって、より一層真の自己を発見することも含んでいる。向こうから来るもの

をどう受けるかは、大人にとって常に課題でありつづける。

三歳の子どもが衣服をぬがされるのをいやがったとき、子どもが受身の立場にあるのだが、その状況を受けて立つのは保育者である。そこで大人の考えを押し通したら、保育者は他者の世界にふれることはできない。子どもの抵抗に出会い、子どもの側の感じ方や考え方があることに目を向けるとき、保育者の視野は異質な子どもの世界にまでひろげられる。

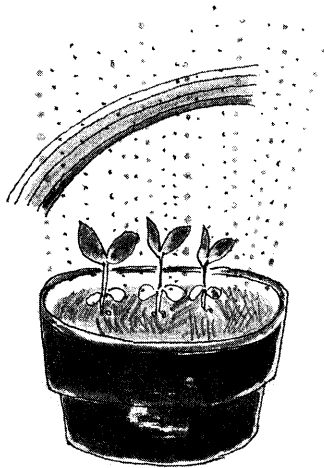
K男と同様に、「される」ことにとくに敏感な大人もいるだろう。そういう人は、子どもと一緒にいる場で、思いがけないことに会おうと、まずそれを拒否しがちである。けれども、子どもものときから、受動を能動にかえることをくり返し経験し、次第に相手があるがままに受けとめる大人へと、人は成長し得る。更に大人は、子どもを育てる保育者となるとき、受ける仕方を修練する場が与えられる。壮年期の自我の成長の時である。

この原稿を書いているときの一日、レールをつなげて汽車を走らせていたK男が、急に保育室にかけこんで戸を閉めたことに私は気が付いた。そっと戸をあけてみるとK男は泣きそうになっていて、私に気が付くとすぐに戸をしめてしまった。そこにいた人にたずねると、K男は三人の男の子と面白くレールで遊んでいたが、K男の汽車を一人の子が取ったらその子の頭をぶって、保育室に走っていったということだった。K男は手の中の汽車を取られることに敏感に反応し、そして自分の感情が動揺したのを人に見られるのがいや

だったのだろう。けれどもじきに保育室から出てきて遊びはじめた。他人に自分のものを取られても、そこに生じた感情を自分自身で処理し、すぐに他の子どもと、一緒にの生活にもどった。子どもなりにその場を受けとめたのである。

K男は、相手のことがわかるチェントルマンだと、日頃から皆に言われている。

(愛育養護学校)



心が育つということ その(1)

幼児の持つ「内—外」意識の 変容をめぐるって

豊田 一秀



人は常に、何かに包まれていなくてはならない存在であると、私は思う。胎児は、包まれていた胞衣（エナ）によって、「内」を得ていたと考えた場合、その胞衣を、宇宙にまで拡大すること、換言すれば、各人の「内」を自ら広く育てていくことが、人が活（い）きて成長していくことであるとは言えないだろうか。

おそらく、人生の中で最も居心地の良い家であったであろう、母親の胎内から産み出された新生児は、外界において、一個の生命体として、呼吸をし、食事をとり、排泄をし、寒暖の変化に耐えていかなければならない。もはや、彼はそれまで包まれていたものを失ったのである。出産を精神的な「捨子体験」であると見る見方も、ここから由来している。

さて、新生児を最初に包むのは、一般には、母親である。母親は、新生児を出来るだけ心地好い状態に置くよう、最大の配慮をする。

一方で、新生児も、母親を自分の方に引き寄せるべく、能動的に母親に働きかけることが、次々に明らかに

なってきた。例えば、エリクソン（一九七二）は、このことについて以下のように述べている。「新生児は、確かに物理的環境を支配する何物をも持っていないが、その表情や反応で、成人の注意をひき、自己の欲求を満たさせ、新生児の健全な成長を見守る人の関心をひきおこさせ、また、新生児の面倒をみさせることによって積極的な養育熱を更に刺激する。」また、ポウルビィ（一九六九）は、愛着人物の選択過程について述べる中で、「他の刺激より優先して、ある種類の刺激へ定位し、注視し、聞く、という（乳児の持つ）内在的傾向、この傾向によって、非常に幼い幼児は、自分を世話する人に特別な注意を払うようになる。」と説明している。

この一連の、母親と乳児の相互交流の中から、乳児は、生後一五―一七週で、母親を愛着対象とみなすようになる。乳児は、母親に包まれる中で、母親を自分の「内なる存在」として、他の人物と弁別するようになるのである。乳児はここに、最初の安全基地を得たと言える。

この事実は、幼児期においては、例えば、次のような形で表れ、変化をみる。

母親のスカートを握ったまま、片時も離れられなかった子どもが、あるとき、スカートから手を離せるようになり、やがて一人で外に出られるようになる。子どもは忍耐と努力、そして訓練とによって、親から離れられるようになったわけではない。手にスカートの手触りがなれを感じつつも、スカートから手を離していても、それを掴んでいた時の気持ちを感じるようになり、また、一人で外に行っても、傍らに母親がいた時の安心感を維持できるようにする。すなわち、子どもが、自分を自らで支えられるようになるには、子どもの心の中で、外界の見え方に対する内的な変化が起こる必要があるのではないか、そして、それが結果として行動の変化に現れたとは考えられないだろうか。

内なるものを広げていくこと、すなわち、自分を包むものを胞衣から、宇宙にまで広げていく過程の中に、私は人の成長をみていることについて、前述した。このこ

とを、異なった言い方で補うならば、人は常に何かに支えられている必要があるが、その支えを多様化していくと同時に、支えを外在的なものから、内在的なものに移行していく過程が、人の成長であるのではないかと述べてもよいであろう。

ここでは、幼児が未知な空間、モノ、人物、といった外界を、内なるものに変容させていくためには、どのような要素、条件を必要としているのか、また、その際に、大人はどのような形で幼児を援助することが可能なのかについて、数回に渡って考察してみたい。

(1) マージナル (marginal) と「う」

幼児は成長と共に、外界に対する認知を深めてゆく。

これは、空間、時間、生物（人間も含む）、物質など、幼児を取り巻くあらゆるものが、それぞれに持つ違い（多様性）について、幼児が区別出来るようになってくるといってもある。幼児の示す人見知り（心を許した内なる人と、そうでない人）、偏食（慣れ親しんだ食

べ物と、そうでない物）などは、幼児がこの違いを内、外、として認知し区別していることを現わしている。

しかし、この認知は、時と共に変容してくる。幼児のこの、内、外意識の変容を考えた場合、その過程において、両者を橋渡しし、結びつけるものの介在を必要とする場合が多い。それは、ある時には人間であり、物質であり、空間であり、そして時間であったりするのである。この広義における介在物が、ときどきにあって、子どもを支えるのである。私はこの介在物を「マージナルなもの」と位置付けたい。マージナルとは、こうしてみると「内」と「外」を統合する「のりしろ」であると言えよう。

本節においては、マージナルな空間、時間、モノ（人間）という順序に添って考察を加えてみたい。（モノに関しては次回に掲載）

(2) マージナルな空間 ベランダという空間

〈事例 1-1〉

年長組の子どもが六、七人、三歳児の部屋に遊びに
来ている。そして、三歳児の部屋に備えつけてある積
み木や、遊具でダイナミックに遊んでいる。この動き
の大きな遊びが、この部屋を活気あるものとしている
半面、三歳児は、五歳児に自分たちの遊びの空間、お
もちゃ、そして、なによりもリズムを奪われて、三歳
児のつくる、彼ららしい雰囲気が失われている。何人
かの三歳児は、年上の子どもたちとの遊びを楽しんで
はいるが、他の子どもたちは、年上の子どもたちの遊
びを傍観している。小雨のため、教師は外で遊ぶこと
を禁止していたが、活発な子どもたちは、それにもか
かわらず外に出ていってしまう。そのような状況の中
で、RとSは、二人して何をするでもなく、部屋から
出てベランダに座っている。(Y保育園)

活発な子どもたちが外に出てしまったのも、室内に彼
らの遊ぶ場所がなかったことを思うと、その行動も理解
できるように私には思える。一方、RとSにとって、室

内での喧噪に身を置くことも、また外に出て遊ぶこと
も、その時の彼らの気持ちにはそぐわないのだ。二人は
ベランダに座っているだけで、会話を楽しんでいるわけ
ではない。しかし、積極的に友人に働きかけてゆくタイ
プではない、くち数の少ないRとSが、おそらく同じ気
持ちでその場に座っているであろうことが、私には察せ
られる。この場合、ベランダは外(園庭)と、内(部
屋)の境界に位置付く「場」である。ベランダは屋根の
ある外であり、同時に外の開放感をもった内でもある。

室内で年上の子どもたちと遊ぶことも、または外で活発
な子どもたちと遊ぶことも、どちらも気持ちとして馴染
まない、その時の二人には、このマージナルな場にたた
ずむ事が似合っている。違った言い方をするならば、こ
のマージナルな空間が、その時の二人を救っているとも
言えよう。施設におけるマージナルな空間としては、ベ
ランダの他に、廊下などが考えられるであろう。これら
の空間は、その時々の子どものたちによって選択される貴
重な空間である。一方、教師の側から見れば、子ど

も、がどの空間を選びとったかを見ることで、その時の子どもの気持ちをある程度、察する事も可能であろう。

(3) マージナルな時間 降園の時、目覚めの時

〈事例 1—2〉

同じ宿舎の人の運転で、AとBは保育園から帰って来る。車から降りると、Bはカバンと帽子をポイッと投げ捨て、道で遊び始める。その事をいくら注意しても全く耳を貸さない。結局は、親が片付けることになる。Aもカバンを親に持たせ、自分では持とうとしな
い。(家庭にて)

〈事例 1—3〉

Aは、朝、目覚めた時、近くに母親がいないと知ると「お母ちゃまー、こっちに来ーてー！」とヒステリックに叫ぶ。母親が「今、顔を洗っているのよ、すぐ行くわ」と答えても、Aは同じことをキーキー声で、オウムがえしに繰り返す。その後の朝食の時も、

Aは自分から食べようとはせず、「食べさせてー！」
と言う。(家庭にて)

〈事例 1—2〉も〈事例 1—3〉も、共に子どもが、その活動世界を移した直後の不安定な時の出来事である。

〈事例 1—2〉は保育園から自分の家に帰った直後の事であり、〈事例 1—3〉は目覚めの時、すなわち、夢の世界から現実の世界へ戻った直後の不安定な時の事である。子どもにとって、そこが、実際にはみなれたはずの身近な場であっても、そこに身を移した直後には、その場を内なる世界とすべく、自分を再調整しなくてはならない時もあるようだ。この、自分をその世界に再調整するという仕事は、子どもにとって、なかなか難しいこととあって、大人の手助けを必要とする事も多い。前述の事例においては、子どもたちは、親に依存的になることで、その世界に対してコントロール感を持ち、結果として、内なる世界にしようとする努力している。しかし、大人の目から見ると、この子どもの状態は、子どもが本当

は出来ることを自分でしようとしていない状態と見え易いので、大方の場合、クセになっては大変、という大人のしつけ感覚を刺激して、子どもへの反応をネガティブなものにしている場合が多い。実際の場面において、このような時には、全て子どもの言うなりになる必要があるなど、私は述べるものではないが、自らの置かれた世界を調整しようとしている、こうした子どもの一つの努力を、大人は心のかたすみで読み取った上で、その子どもに対処するゆとりが必要であると思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

参考文献

- (1) Bowlby, J., 1969 "Attachment and Loss, Vol. 1 attachment". The Hogarth Press. (黒田実郎他訳一九八〇 母子関係の理論①愛着行動 岩崎学術出版社)
- (2) Bowlby, J., 1973 "Attachment and Loss, Vol. 2 Separation : Anxiety and Anger" The Hogarth Press. (黒田実郎他訳一九八二 母子関係の理論②分離不

安 岩崎学術出版社)

(3) Erikson, E. H., 1950 "Childhood and Society",

W. W. Norton, N. Y.

(仁科弥生訳一九七七 幼児期と社会Ⅰ みすず書

房)

(仁科弥生訳一九八〇 幼児期と社会Ⅱ みすず書

房)

(4) Erikson, E. H., 1964 "Insight and Responsibility",

W. W. Norton, N. Y.

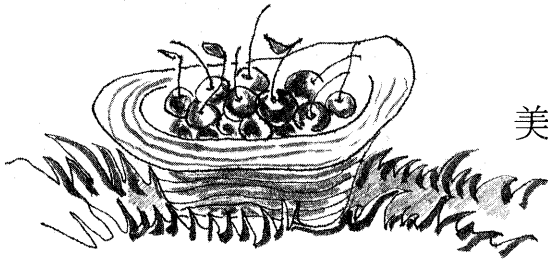
(鑪幹八郎訳一九七一 責任と洞察 誠信書房)

※ この原稿は、一九八五年提出の修士論文の一部に、

加筆・修正を加えたものである。

桜んぼの村

グレッヒエンベルクを訪ねて



子 いく島 谷 美

グレッヒエンベルクへ

桜んぼの熟す頃になると、私は、グレッヒエンベルクという桜んぼの大木に囲まれた、小さな村のことを思い出す。私が、二人の娘と共に、グレッヒエンベルクを訪ねたのは、一九八六年六月下旬のことであった。

グレッヒエンベルクは、西ドイツ南部のバイエルン州ニュールンベルクから、北へ車で一時間に位置する、チエコスロバキアに近い、山の中の村である。普通の地図には載っておらず、ドイツ人でさえ知らない程の片田舎で、村人は純朴で親切であった。

緑に囲まれた風景の美しい所で、「フランケン地方のスイス」と呼ばれ、ニュールンベルクに生まれた、アルブレヒト・デューラーが、この近くの景色を、よく描きに訪れたという。泊った宿からの眺めは、野原と森が地平線まで続き、時々、鹿が近くまで遊びにくる。

北方にはチュービンゲンの森、東方にはポヘミアの森を控え、冬が長く雪に閉ざされ、材木に恵まれたこの地方一帯に、木彫りの人形(Docke)作りが、農民の炉端

の手仕事として盛んになり、「ニュールンベルクの人形」として世界中に有名となった。

グレッツヒェンベルクには、大学のドイツ語教官として来日し、松本に三年間滞在され、共に子育ての時を過ごした、シュミット一家が住んでいる。

この時、私達一家は、三年半ぶりに西ドイツヘッセン州グリム兄弟縁の大学街、マールブルクに滞在していた。

六月二十二日朝、七時四十五分に家を出て、マールブルク駅まで主人に送ってもらう。フランクフルト発十時二十一分のI.C.^{インターシテイ}に乗る。長女Kは、ハーナウを過ぎた頃には、朝が早かったので眠ってしまう。車窓より、マイン河の水面が初夏の太陽に輝いて見える。四年前、私と娘Kは、グリム兄弟の生まれ故郷ハーナウを訪れ、

ハーナウ城のカンナが咲き乱れる庭からこの河を眺めた。帰国後、すぐにシュミット一家との出会い。次女Mの誕生で子育てで忙しい合い間に、グリム童話やトリスタンとイゾルデ等をシュミット夫人と一緒に読んだ三年

間。そして今、私は二人の娘と共に、シュミット一家を訪ねる旅の車中にある。私は人との出会いの不思議さに思いを巡らせ、四年前と変わらずゆったりと流れるマイン河を見つめていた。

十二時五十八分、ニュールンベルク着。ホームまでシュミット夫人と次女ニーナ（七歳）が出迎えてくれる。昨夏、別れてから十か月ぶりの再会である。駅の外の車に、シュミット氏と、長女アメリー（八歳）と長男トビアス（三歳）が待っていてくれた。懐しいニュールンベルクの旧市街（マルクト広場、マリーエン教会、玩具博物館、デューラーハウス）を見て、グレッツヒェンベルクへ向かった。車道には、桜んぼを売る露店が時々見られた。

桜んぼ

十四時五十分、シュミット家に着く。家のすぐ前に、桜んぼの大木が何本もあり、赤い実が熟れている。

子どもの背丈位までたわわに垂れ下がっている。子ども

達は、お茶が終わるとすぐに、桜んぼの木へ走り去った。袋を一杯にしては、耳にイヤリングのように桜んぼを下げて戻っては来たが、又すぐに桜んぼの木の下へ行き、夕食まで帰らなかった。

「桜んぼさん、あなたは、どうしてそんなに赤くおいしそうな顔をしているのっ：おいしそうな匂いと、赤い頬っで、口がもずもずしているわっ：」

(Kの桜んぼに対する語りかけ、六歳の時を思い出して書いた文から)

夏至に近いこの季節は、冬の長い北国ドイツの人々にとっては、待ち遠しかった煌々ような季節。日本のように梅雨はないので、青く澄み切った空のもと、森から吹いてくる初夏の爽やかな風が、麦畑や牧草地や桜んぼの梢を渡り、麦を実らせ、牧草を伸ばし、桜んぼを熟れさせる。

一八四七年発刊のカール・ティーネマンの筆による、子どもの為の絵と格言のカレンダー「一年と一日」(註)の六月は「千草づくり」、七月は「桜んぼもぎ」

である。

「桜んぼもぎ」

さあ みんな見て！

私は庭の桜んぼの木

緑の葉っぱの間に見えるのは

真っ赤に熟れた桜んぼ！

登ってお取り！

だけどズボンを破いちゃだめよ

つまみ食いもほどほどに

でないとお母さんにしかられるから

グレッツヒェンベルクは、南なので暖かく、六月下旬に桜んぼが熟しているが、西ドイツ中央に位置するマールブルクは、ここより北で寒いので、市場マルクトに走りのものを見かけたが、木に生っているのはまだ青かったから、熟れるのは七月になるだろう。

ドイツの桜んぼは、日本のものより実が大きく甘い生

食用と、保存用として加工する酸っぱい桜んぼ (Sauer Kirsche) がある。後者は、ママラーデ、桜んぼ酒、桜んぼジュース、お菓子に使う罐詰にされる。桜んぼもぎは子どもにとって楽しい年中行事であり、働きの者のドイツの主婦は、一年分の食卓を初夏の煌きで彩る桜んぼの保存食作りに、忙しい時を過ごす。南ドイツ地方に古くから伝わるココア入りの台生地の中に、サワー

・キルシュと生クリームをはさみ、上に砂糖漬けの桜んぼを飾ったシュヴァルツヴァルデ地方の桜んぼトルテは絶品である。シュヴァルツヴァルデ地方の女性の民族衣装の帽子には、赤く大きい桜んぼがあしらわれている。

桜んぼの梢を渡ってくる心地よい風を受ける前庭で、ニールンベルク名物ブラート・ブルストや、豚肉のビール焼きが香ばしく焼けるにおい。シュミット氏がワインの栓を抜く。いつまでも暮れない初夏の夕べ、シュミット夫人手作りの晚餐がゆっくり始まる。

グレッツヒェンベルク幼稚園

六月二十三日、快晴。八時に宿で、典型的なドイツの朝食(焼きたてのブロードヒェン、フォルコーンブロート、チーズ、ハムが何種類か、さめないよう鶏の形に編

◀桜んぼが、たわわに熟れている園庭で



んだカバーがかけられているゆで卵、コーヒー、子どもは(コア)をとり、シュミット家へ行く。Kは、昨日の桜んぼ取りが気に入ったとみえ、ニーナと、すぐに桜んぼ取りに行ってしまう。九時に、シュミット夫人と、彼女の子どもを送りながら、二人の娘を連れて、徒歩で五分程にあるグレッヒエンベルク幼稚園を訪ねる。

グレッヒエンベルク幼稚園は、教会付属で、級は、縦割三〜六歳児混合の三クラス、園長一名、教師三名で、自由保育をしている。園庭には木が多く、桜んぼの大木が何本かあり、桜んぼが赤くたわわに実っている。広い芝生の庭には、丸太で作られた遊具や長椅子がゆったりと置かれている。

子どもは、お祈りの時間で、講堂に主任の先生を中心に丸く輪になって椅子にかけていた。中央には白い蠟燭が一本置かれている。火を灯したい子どもに挙手させ、マッチで火を付けさせ、お祈りを始める。

次に、この日新入園児が三名あり、その紹介をする。この中にトルコからの移民の子どもも一人いた。日本の



▲ 蠟燭を囲んで、これからお祈り

ように、四月一斉に入園式をして入園というのではなく、各々が三歳の誕生日を迎えた時に入園するのである。入園にしても、服装にしても、自由で個人に任せられてお

り、画一的に一齐にするということはない。

この園でも外国からの移民に対する細かい配慮が見られる。最近では、ドイツ人失業者が増加しているので、移民であるトルコ人とのトラブルが多いと聞いた。しかし、これから国を担う子どもが、人生のはじめの時期に、幼稚園で差別なく、異質の文化を持った子どもと遊び係わることを体験していることに、西ドイツという国の良識を見ると同時に、将来に大きな希望を抱かせる。

先生は、私達の紹介に入る前に、子どもに「この中に、遠い日本からのお客様がいるが、どの人かわかりますか？」とたずねた。子ども達が、一齐に私達の方を指差した。先生は、「なぜわかったか？」と子どもにもたずねた。「髪と目が黒いから」と子ども達は、口々に答えた。

紹介の後、「何か日本の歌を歌って下さい。」と言われたので、私達は、ニーナとトビアスも加わって五人で、「籠目籠目」を、手をつなぎ輪になって巡りながら歌った。「日本語は、すべて忘れた」と昨日、恥ずかしそう

に言っていたニーナも、完全に思い出して歌っていた。

「……後の正面だーれ！」と終わると、子ども達が「ブラボー！」と叫んで拍手が起こり、打ち解けた和やかな雰囲気になっていた。

「ドイツの籠目籠目」

これと逆の、似たようなことが少し前にあり、娘達は、それを「ドイツの籠目籠目」と名付けていた。

娘達が、今度の滞独中、初めてマールブルクのキンダーシュピールへ行つた五月二十二日のことである。娘達は、帰宅するなり「お母さん、お迎え、もう少し遅く来て！」と、私に頼むのです。不思議に思つて訳をきくと「先生が、帰る前に、ドイツの籠目籠目をやって下さるので、楽しくて楽しくて！ 迎えが早いと、途中で止めねばならないので、つまらないから。早く幼稚園のある明日にならないかなあ！」と答えた。

娘達は、おやつを持ち、七分程の、桜やリラの並木道を通園していた。私は、四年前に通つた経験のある姉は大丈夫としても、妹のことは内心不安だった。この言葉

に一安心した。言語はわからなくても、ドイツの子どもと一日で仲良くなれたことに感動した私は、これ程、娘達を魅了する遊びは、どんな遊びかたずねてみた。“Zeit her eure Füßchen”と輪になって歌いながら、足と靴を見せ合ってから、洗濯をする手順に、洗う、絞る、干す、アイロンがけと、身振り動作を付けて巡る遊びらしい。初めての異国の幼稚園での、輪になり歌いながら巡る遊びは、娘達の幼年期の瑞々しく嫋やかな時間の中に、原体験として確実に像を結んだようである。このドイツの童歌は、娘達の一番好きな歌となっている。



その後、運動会が近くあるということで、子ども達は、御幣おまげのような物を持った主任の先生と、練習を始めた。その間、園の中を案内して貰い、おやつの時間となった。ドイツでは朝が早いので、おやつを持たせる。子ども達は芝生の長椅子に並んでかけ、サンドイッチ、ヨーグルト、クッキー、果物等を食べている。終わるとそれぞれ庭に散り、シーソー等で遊び始める。私も、職



▲ 教室で

員室でコーヒーと菓子パンを頂いて、姉のKは園に残し、降園までの時間を、シュミット夫人と、徒歩で旧市街に出かけた。

中世を思わせるような城門をくぐると、マルクト広場ブルンネンになっており、泉があった。ドイツは、地方分権が続いているよさであろう。どんな街や村でも、それぞれの顔



▲ 園庭でおやつ

を持って旅人を迎えてくれる。ライトハウス（市庁舎）は、南ドイツらしく壁に絵がかかれ、窓枠が白く塗られた窓には、桃色と白のセラニウムが置かれていた。



▲ 桜んぼが、たわわに熟れている園庭で

マルクトでシュミット夫人の友人と出会い、彼女のワゴン車に乗せてもらって園へ迎えに行く。この車は、一人の子どもを迎えるには大きすぎると思っている、シュミット夫人が、「この方は、家庭崩壊等で、両親と一緒に生活することができなくなった子どもの世話をする国営の寮の人である」と説明してくれた。先程、園を見学した際には、全く気分がなかったが、この一見平穩そうに見える田舎の、グレッツヒェンベルク幼稚園にも、離婚、年齢の早過ぎる結婚等が原因で、家庭崩壊している園児が五人もいるという。彼女は、その五人を迎えに行く途中ということだった。

十二時少し過ぎに幼稚園に着き、シュミット夫人が、幼稚園の先生に日本語を教え始めているというので、「ニーナ姉妹の通っていた松本の幼稚園で、再びお会いしましょう。」と挨拶して園を去った。

シュミット家でジャガイモ料理の昼食を頂き、沢山の桜んぼをお土産に皆とお別れした。バス停まで皆で送っ

て下さった。十三時五十五分のバスでニュールンベルクへ向かった。山道の両筋には、初夏の爽やかな風に桜んぼがひとときわつややかに煌いて揺れていた。ニュールンベルクのマルクト広場に面する店で、この地方で、十五世紀の昔から森の民の手仕事によって作られている、木彫りの聖歌隊の人形と、人形の家用の白地に花模様のニュールンベルク焼きの陶器のミニチュア、ティーセットを買い、ヴィルツブルク行きインラインタイのI Cに乗った。

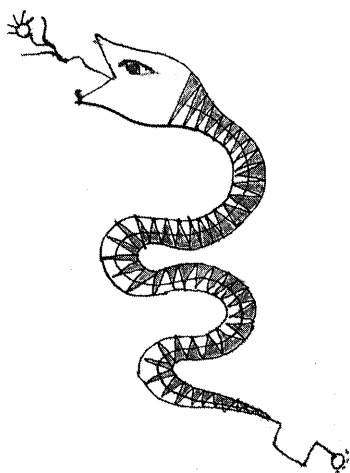
(松本市在住)

(註)

カール・ティーネマン『一年と一日——絵と格言の
カレンダー』シュライバー&シル、一八四七年、(ベ
ルリン・コレクション ほるぷ出版)

虫

松井 とし



五月の連休の後、S子が二匹の青虫を持ってきた。埼玉の祖母の家へ行つてとつてきたのだという。さっそく観察箱に入れ、「自然」の本の中から「あげは」を取り出して一緒に読んだ。次々に登園して来る子どもたちも

「それどうしたの。」

「ほくも飼ったことある。」

などと興味を示し、朝のひとときテーブルのまわりはにぎやかだった。

その輪の中で、S子は眼をまん丸くして友だちの言動に見入っていた。彼女は年少児の一年間を受動的に過ごした。教師の問いかけや誘いにはおうむ返しで答え、生活態度にも緊張が目立った。まわりの友だちの様子をじっと見て、納得してから行動を起こすので、友だちも出来にくかった。

S子は毎朝キャベツを持って登園し、そのキャベツをモクモク食べて、いも虫は大きくなっていった。そしてある日、いも虫の姿が見えないと探すと、箱のふたの上に体をくくりつけ、さなぎになっていた。子どもたちは時々ようすをみて、本と見比べたり、自分たちの当番表の形を蝶に決めたりしながら、さなぎの変身を心待ちにしていた。S子も当番の日には蝶の形のバッジを胸につけ、誇らし気であった。

そしてしばらく変化がないまま、ついに六月八日の朝、箱の中で白いものが動いているのを発見、みんな息をのんで見入った。

箱のふたをあけると、真っ白なちようちよは青い空に吸い出されるように、ややたよりなげに飛び立った。

「げんきでね。」

「おかあさんに会うんだよ。」

口々に声をかける子どもたち。その中でS子の瞳が輝いていた。

S子は年長になり、友だちに巡り会い、このころは少しずつ本来の自分を表しながら自信をもって生活できるようになっていた。もんしる蝶の成長は、S子自身の飛翔のイメージと重なり合い感銘深かった。

(神奈川県立教育センター)

口蓋裂を持つ子どものことは…概説

村上 敏子

私は、現在三つめの職場にいる。前の二つは、福祉施設であり、現在の職場は病院であるが、言語障害に関する臨床と研究という仕事の内容に変わりはない。

私の所属する言語治療科には、病院内の他の診療科からことばに問題がある成人や子どもの紹介がある。相談総数の二分の一は脳神経センター、三分の一は形成外科、残りの六分の一は小児・新生児センターからの紹介である。

脳神経センターや小児・新生児センターからの紹介に

ついては、既に言語障害を問題として持っているのが通例であるが、形成外科からの紹介の場合は、少し事情が異なる。

形成外科から紹介されるのは、口蓋が融合しないで割れた状態で生まれて来た子ども達——口蓋裂の子ども達であるが、未だ生まれて間もない赤ん坊であり、将来言語障害を持つことになるか否かについての確定的な判断はできない。どのような因子が、言語障害の発生に関与するかということについて、全てが、明らかになってい

るわけではないからである。そこで、早い場合には、生後一週間位の時期から発達の経過を見ていくことになる。

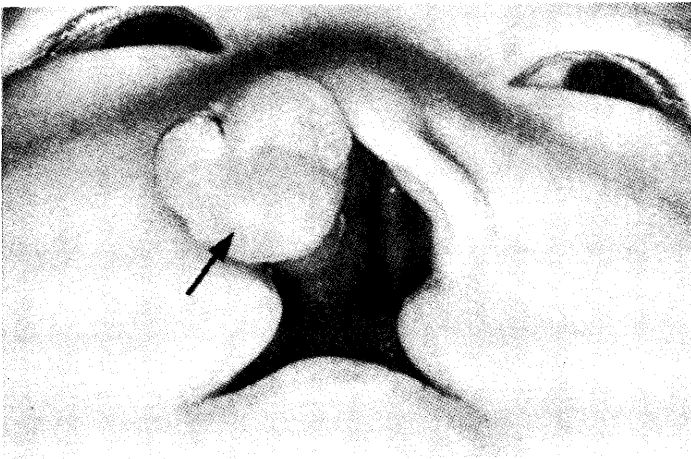
〈口蓋裂とは〉

a、片側性唇顎口蓋裂（新生児センター提供）

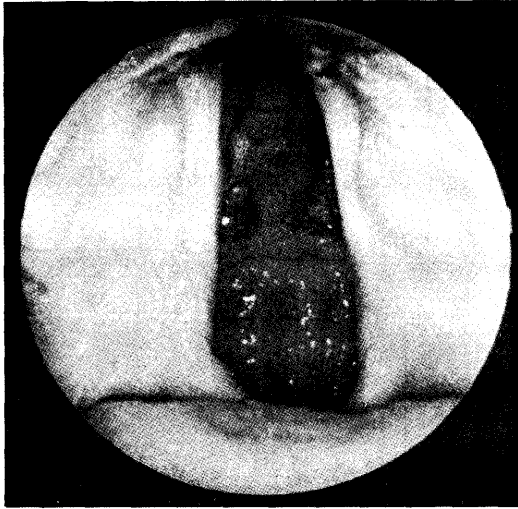


b、両側性唇顎口蓋裂

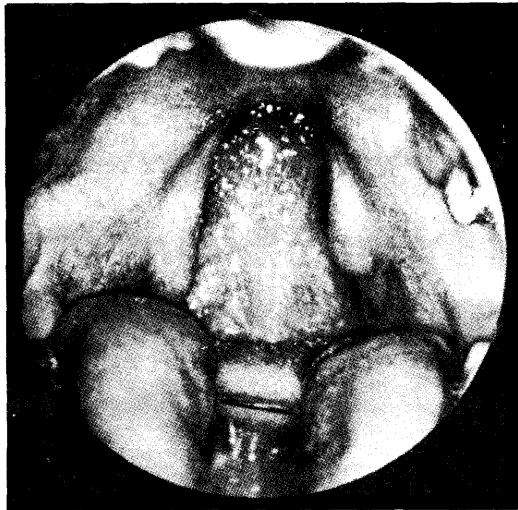
（医学書院発行『口蓋裂の言語治療』
一九八三より）



▲図1 唇裂を伴う口蓋裂



a、硬口蓋と軟口蓋の裂



b、軟口蓋だけの裂
(医学書院発行『口蓋裂の言語治療』より)

▲ 図2 口蓋裂単独

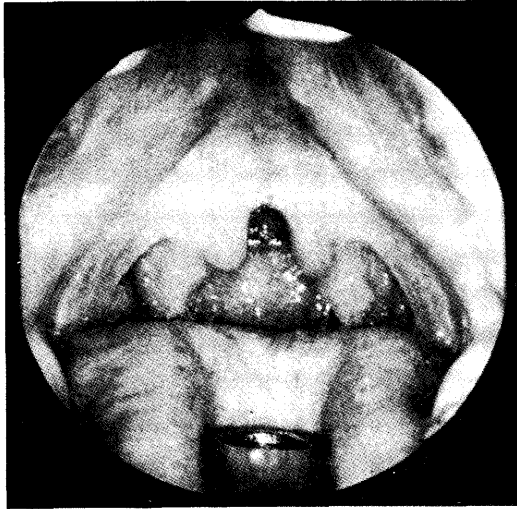
口蓋は、口の中の天井にあたる部分である。口蓋の前方は硬く、硬口蓋といい、粘膜の下は、骨である。口蓋の奥の方は、軟らかく、軟口蓋と言う。軟口蓋は、筋肉でできており、必要に応じて動く。

口蓋裂というのは、口蓋が何らかの原因で、融合せず、裂けた状態で生まれてきたもので、唇裂を伴うこと

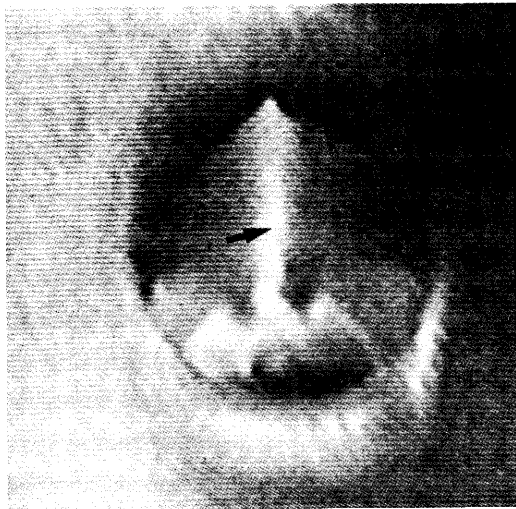
もある(図1、図2)。

また、外見上は、口蓋の裂を持たないのに、左右の筋層が、融合しておらず、軟口蓋の正中部が、粘膜だけでおおわれていることがある。いわば、滞在性の口蓋裂で、粘膜下口蓋裂という(図3)。

私達が、静かに呼吸している時、軟口蓋は、垂れ下



a、粘膜炎下口蓋裂



b、鼻腔から光を入れて、軟口蓋の透過性を見たところ
(医学書院発行『口蓋裂の言語治療』より)

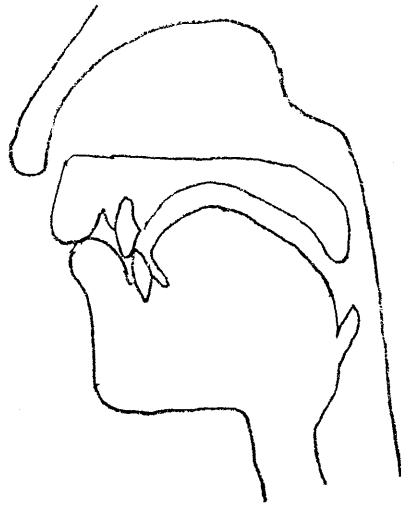
▲ 図3 粘膜炎下口蓋裂

がっているが、口の中の圧を外気より低くしたり、高くしたりする場合には、口腔を一つの閉鎖した空間とする必要がある。鼻から外気が入って来ないように、軟口蓋を挙上して、口腔と鼻腔とを遮断する。このように、軟口蓋の運動で、口腔と鼻腔とを遮断する働きを、鼻咽腔閉鎖機能という(図4)。

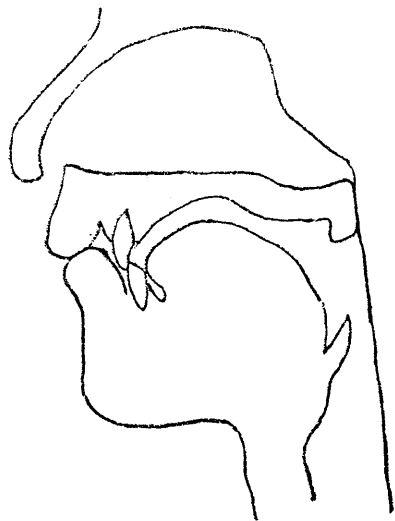
〈哺乳の問題〉

しかし、口蓋裂があると、口腔と鼻腔とが一洞化しており、鼻咽腔閉鎖ができない。この鼻咽腔閉鎖不全のため、いくつかの問題がおこる。

赤ん坊が、お乳を吸う時には、口の中の圧を、外気よ



安静呼吸時



鼻咽腔閉鎖時

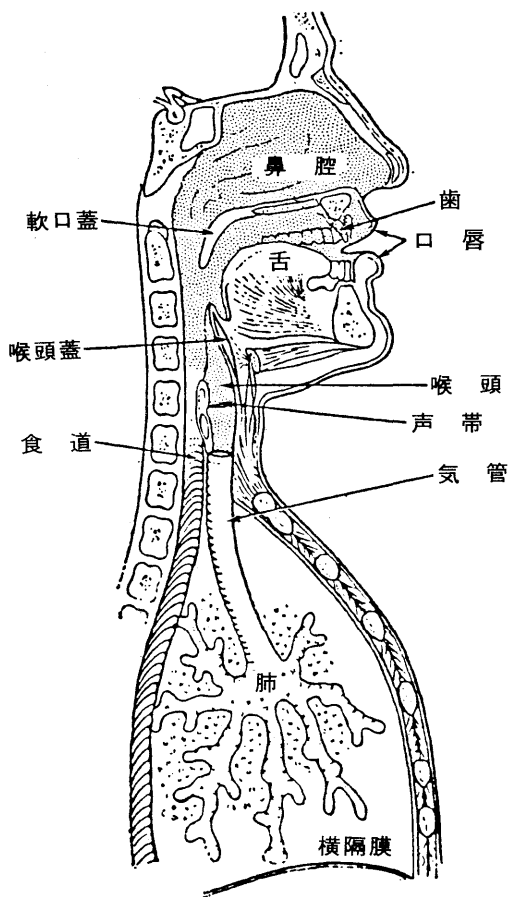
り低くする必要があるので、口蓋が割れていると、口腔と鼻腔とを遮断することができず、口腔内の圧を十分に下げることができない。そこで、出生後先ずおこるのは、お乳を吸う力が弱いという、哺乳の問題である。この問題は、哺乳瓶の乳首を工夫することで、改善することができる。

しかし、母親の乳首から直接にお乳を吸えなかったこ

とが、後の言語発達に全く影響を及ぼす可能性はない、と断言することはできない。

〈語音産生の問題〉

音声器官、すなわち、言語音の産生に関する身体部位は、肺、気管、声帯を含む喉頭、咽頭、鼻、口であり、これらの器官は、肺から口唇へつながる複雑な形をした



▲ 図5 人間の音声器官

(東京大学出版会『話ことばの科学』
1969より)

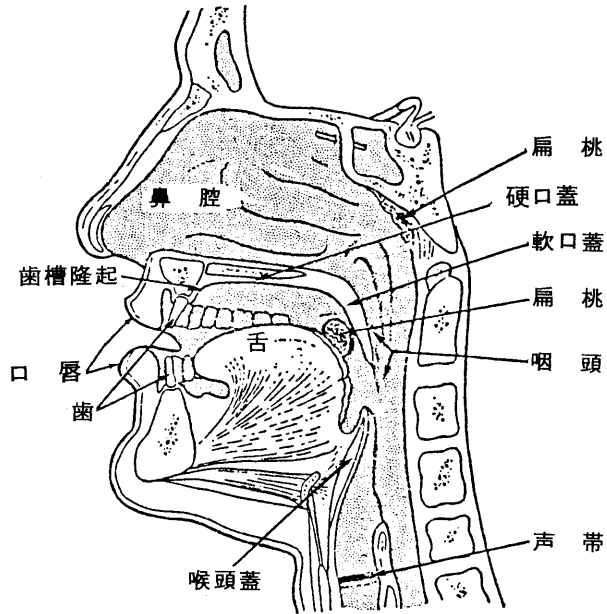
管を成している(図5)。

喉頭より上の部分は、声道と言ひ、咽頭、口、鼻より成っている(図6)。

声道の形は、舌や口唇等を動かすことにより絶えず変化し、従つて、音響特性も変化するわけであるが、それによつて、声帯で作られた喉頭原音は、修飾されて、さ

さまざまな語音となる。語音は、各々、作られる場所(構音点)と作られる方法(構音方法)が決まつており、構音点と構音方法の組み合わせによつて、様々な音が出し分けられる(表1)。

鼻咽腔閉鎖不全があることは、当然、語音の産生にも影響を及ぼす。



▶ 図6 声道の断面図

(東京大学出版会発行『話ことばの科学』

一九六九より)

鼻音は、鼻に共鳴させて作る音であり、構音（以下、発音）する時に、呼吸を口腔からだけでなく、鼻腔からも出すので、鼻腔を閉鎖する必要はない。口蓋裂があっても、鼻音は正しく出せるわけである。しかし、鼻音以外の音を発音する時には、鼻腔に共鳴させず、呼吸は、口腔からしか出さないの、鼻腔を閉鎖する必要がある。従って、口蓋裂に伴い鼻腔閉鎖不全があると、非鼻音が正しく発音できない。これは、共鳴の問題である（図7）。

鼻腔閉鎖不全の状態下で言語発達が進むと、子どもは、工夫を凝らし、少しでも正常に近い音を出そうとするが、その結果、各種の異常な発音を学習し、固定させてしまう。

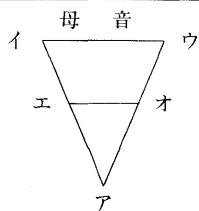
〈手術の効果と問題〉

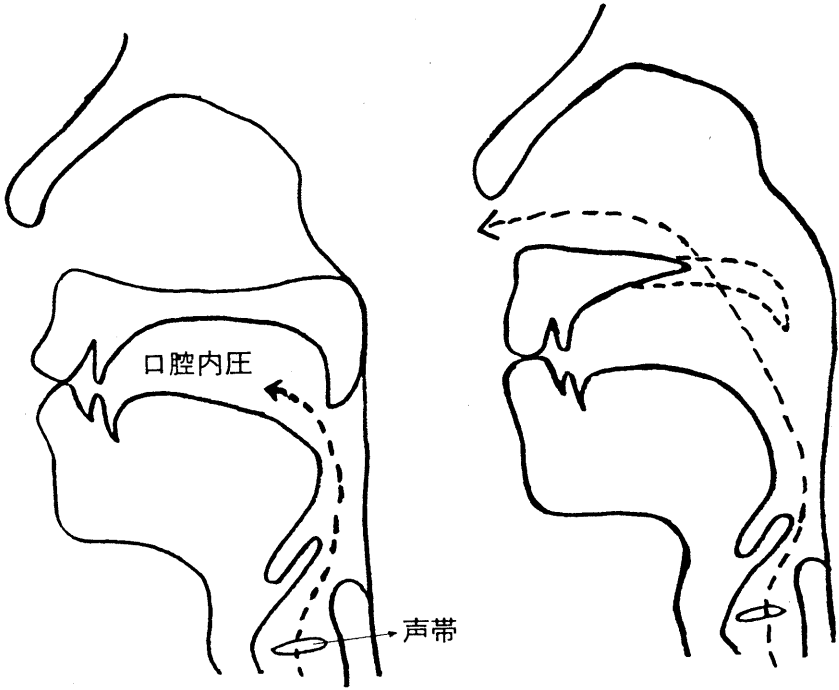
これまでに述べた鼻腔閉鎖不全に基づく共鳴の異常と異常な発音は、適切な時期に適切な方法を講じることにより、解決もしくは、予防できる。そこで、通常は、

〈表1〉日本語の語音

(日本聴能言語士協会学術委員会資料 1979, に著者が手を加えた)

有 声 音	有 声 音	有 声 音	無 声 音	有 声 音	無 声 音	有 声 音	無 声 音	有 声 無 声 の 別	構 音 点	
マ 行 音					フ	バ 行 音	パ 行 音	唇	子 音	
		ザ ズ ゼ ゾ	ツ		サ ス セ ソ			舌尖と 歯		
ナ 行 音	ラ 行 音					ダ テ ド	タ テ ト	舌尖と 歯 茎		
		ジャ ジュ ジョ	チャ チュ チョ		シヤ シュ シヨ			硬口蓋と 前舌面と		
					ヒヤ ヒユ ヒヨ			硬口蓋と 中舌面と		
カ 行 音						ガ 行 音	カ 行 音	軟口蓋と 奥舌面と		
					ハ ヘ ホ			声 門		
鼻 音	弾 音	破 擦 音		摩 擦 音		破 裂 音		構 音 方 法		
						ワ		唇	半 母 音	
						ユ ヨ ヤ		硬口蓋と 中舌面と		





a 正常

b 口蓋裂

▲ 図7 正常例と口蓋裂例における呼気の放出方向
 (日本聴能言語士協会「口蓋裂講習会テキスト」1980より)

一歳前半に、口蓋形成術を行う(図8)。

この口蓋形成術の主な目的は、裂を閉鎖して、正常な形とし、鼻咽腔閉鎖機能を修復することによって、

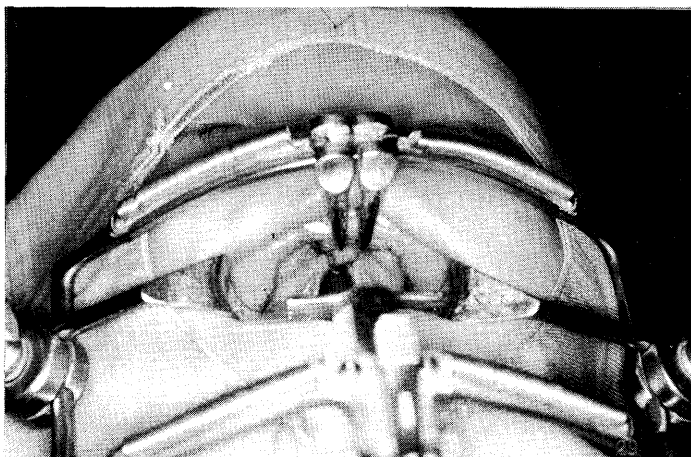
① 正常な食餌摂取能力を得ること、

② 正常な言語発達を促進すること、

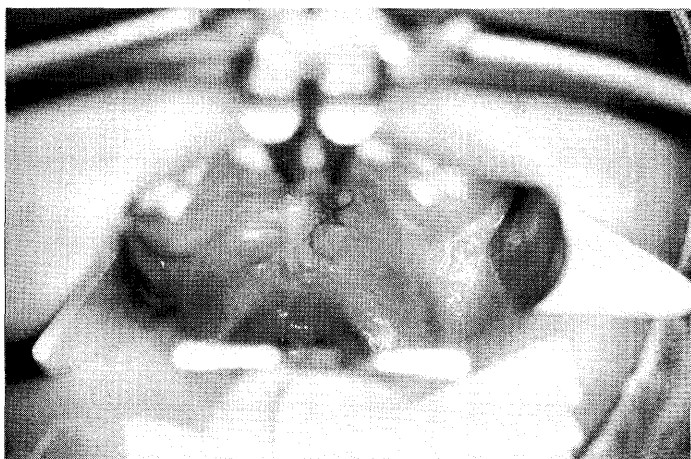
③ 先天性異常があるという劣等感を克服すること
 等である。

このように、将来生じる可能性があったいくつかの大きな問題は手術によって、予防できる。

しかし、唇裂を伴っている場合には、口蓋形成術に先立って、生



a、手術前



b、手術後

▲ 図8 口蓋形成術（形成外科提供）

後三か月頃に口唇形成術を行い、唇裂が両側にあれば、更に、六〜八か月頃に、二度目の口唇形成術を行うことになる。しかも、出生後、最低三週間程度の入院を経験

している。発達の初期の段階での手術および入院が、子どもの言語発達に影響を及ぼさない、と断言することは難しい。

〈発音の再学習〉

十分な鼻咽腔閉鎖機能を確保するのが遅れ、共鳴の異常だけでなく、異常な発音も習得している場合には、手術等の措置をした後で、正しい発音を再学習するための言語指導が必要な場合もある。また、特に唇裂を伴う場合に多いが、適切な時期に鼻咽腔閉鎖機能を確保していても、鼻咽腔閉鎖不全に伴うものとは異なった種類の異常構音を習得していることがある。これは、発語器官相互のバランスや哺乳障害等に由来すると考えられるが、やはり、発音の再学習が必要である。知的発達が、四歳台に達していれば、発音の再学習は可能である。週に一回の指導を、一年間受ければ、完全に正常な発音になる。もちろん、そのためには、本人の意欲と家族の協力が不可欠である。

このように、順調に進めば、言語障害というハンディキャップは、小学校入学前に、解消することができるのである。

〈賢く待つ〉

以前、異常構音が出現した年齢を調査したことがあるが、二歳台に出現した例が最も多かった。他の研究者の調査でも同様の結果が得られている。すなわち、自分の子どもが、正常な発達の道筋においては見られない発音をすることに、親が気づいてから、実際に発音の再学習が可能な発達段階に達するまでに、約二年間の待ち時間がある。私は、この時期を、いかに過ごすかということが、子どものコミュニケーション態度の形成に、大きく影響する、と考えている。

親としては、誠に自然な気持ちだと思うが、わが子の発音の誤りを早く直そう、とあせり、母親が、子どもに言い直しをさせたり、誤りを指摘したりすることがある。しかし、一定の発達段階に達していないと、子どもは、仮に、その時には、言い直しをすることができたとしても、その後も自分のものとして使いこなすことはできない。その上、幼い子どもでも、発音の訂正をされると、自分がかうまく話せていないことを意識し、ことばを

話すことに対する劣等感を持つ。いったん植えつけられた劣等感を取り除くことは、難しい。

「三つ子の魂、百まで。」と言うが、成人してからも、

対人関係や職業選択に影を落とす可能性がある。

口蓋裂の子どもの発音の誤りには、一定の規則があるので、聞き慣れた人には、子どもの話の内容を理解することができる。大切なことは、子どもの話し方に反応するのではなく、子どもの話の内容のみ反応し、子どもに話すことの充足感を与えることである。話すことについての劣等感を持たず、課題場面への適応が良いと、正確な言語の評価ができるので、指導方針がたてやすく、発音の再学習が必要な場合にも、早期に目標が達成される。

ともかく、発音の再学習が可能になるまで、子どもの発達を待ち、専門家の手に委ねるのが、最も賢明である。賢く待てば、既に述べたように、一年位で発音はきれいになり、子どもに劣等感を持たせずに済む。

「待ちの子育て」は、場合によっては、難しいが、や

はり、最も賢明な方法である。

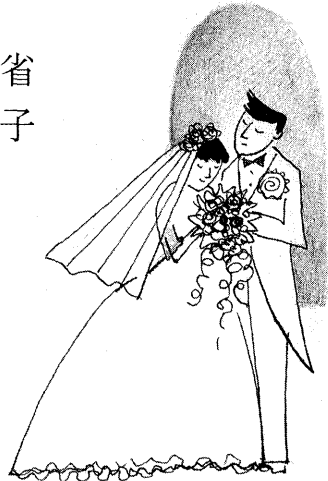
(聖マリア病院・言語治療科)



女性と授乳

——タイ国における調査から——

金子 省子



へはじめに

昭和三〇年代の日本において、人工栄養法（粉ミルク）による授乳が、急速に普及した事はよく知られている。やがて一九七〇年代、世界的に母乳再認識の気運がみられ、厚生省も母乳推進運動の指針を示し（昭和五〇年一月）、粉ミルク業者に対する指導等を行う事となった。同省の全国調査の結果によれば、わが国においても、丁度この頃から、母乳栄養児の割合が増加傾向を示

すとされる。

ところで、生母の乳以外による授乳については、古来乳母の存在や、里子に出すこと、近隣の母親からのもらい乳といった方法があったと思われる。人の乳に代わる代乳品としては、山羊や牛の乳のような動物の乳、米の粉を練った「すりこ」などと呼ばれる⁽¹⁾澱粉質の物が知られている。今日のような人乳に近い組成をもつ加工品の普及は、わが国の場合第二次大戦後の事である。牛

乳業が発達を始める明治・大正期には、人工栄養品とは専ら牛乳の事であり、煮沸法をはじめとする衛生的な取り扱いには相当の困難があったと考えられる。その他、練乳コンデンスミルクの販売と利用も知られている。⁽²⁾「青鞥」を主宰し、「新しい女」と呼ばれた平塚らいてうの、母乳代用品は、やはり牛乳であった。⁽³⁾

母乳栄養法の衰退が、より顕著にみられた米国では、今日、H・L・C. (Human Lactation Center) のような団体が母乳推進運動を積極的に行っている。わが国の場合でも、桶谷式マッサージ法への傾倒にみられるような母乳哺育への志向が、専業主婦層を中心として強まっていることが指摘されている。⁽⁴⁾

従来、授乳についての研究は、小児栄養の領域で、身体発育の面を中心として行われるか、或いは初期の母子関係形式との関連で論じられる事が多かったと考えられる。後者においては、女性が母親になっていく過程への着眼もあるが、いずれにしても、社会的存在としての女性(或いは男性)をグローバルに捉え、授乳をめぐる社

会文化的状況に接近するものは少なかったと思われる。

母乳分泌は、妊娠・出産に伴って生じる、女性の生物学的特性に根ざした事象であるが、これすらも、純粋に自然法則の下にあるわけではない。また授乳行為については、生母でなくとも、出産経験のない女性、男性でも行いうるものである。女性の社会進出が進み、男性の家事・育児参加が求められる今、「生母↓授乳する者↓主たる養育者」という図式において、「産」と「育」の接点に位置づく授乳行為のありようと変更可能性は、注目されるべきものと考えられる。例えば、粉ミルクか母乳か、といった栄養法の選択について、関与する要因にはどのようなものがあるのか。工業化と都市化が「子ども達から乳房を奪う」といわれるが、授乳への関心が母乳推奨である従来の研究視角から自由になり、女性の意識・行動を社会文化的状況のダイナミズムの中に探る試みが必要ではないだろうか。ここでは、タイ国チェンマイにおける調査を手がかりとしながら、考えてみたい。

〈タイ国チェンマイにおける調査の概要〉

一九八七年八月、慈恵医科大学とチェンマイ大学医学部を中心とする、家族計画と母子保健に関する調査が開された。⁽⁵⁾ 数年にわたる計画の初年度であり、筆者は主として授乳に関する調査項目を担当した。

Sankam Peng (Mae Pucan), San Sai (San Na Meng) の二地区、⁽⁶⁾ 計百世帯の母親を対象とした。質問紙は英語で作成し、タイ語に翻訳の後、タイ側の調査者が家庭訪問により記入した。⁽⁷⁾

〈対象地区について〉

チェンマイ (Chiang Mai) は、タイ北部にあり、人口約百二十万、約二万三千平方キロメートルの面積を有する古都である。(日本で言えば一つの県にあたる) 実に95%以上が仏教徒であり、農業人口は全体の八割を占める。

調査対象地区 Sankam Peng の Mae Pucan と San Sai

の San Na Meng は共にチェンマイ市内から車で一時間

以内の距離にあるが、特に後者は市内に程近い。前者をA地区、後者をB地区として、以下比較対照しながらみていく事にする。

1、婚姻及び居住の形態

妻方同居が一般的であり、バーン (baan) と呼ばれる相互扶助的な屋敷地内共住形態が多い。同じ村の出身者同士の結婚が最も多いが、B地区で、他村の者がより多くみられる。⁽⁸⁾

2、家計の状況

両地区とも農業収入の占める割合が最も高く、妻達の内職もみられる。Bでは、夫の内、給与所得者が数名みられ、現金収入の平均はAで約一万七千バーツ、Bで約二万四千バーツとかなりの差がみられる。

3、教育水準

両地区の男女とも、小学校卒業(四年間)が大半を占

める。男性の一部に中学卒がみられた。

4、家族計画、妊娠・出産の状況

平均年齢28歳という母親達は、主にピルを用いている。これまでの妊娠回数が一、二回の者が多く、人工中絶は二例であった。流産・死産が四例、疾病による乳児死亡が三例あった。施設分娩の者がほとんどであり、希望する子ども数は二名とする者が大半である。⁽⁹⁾

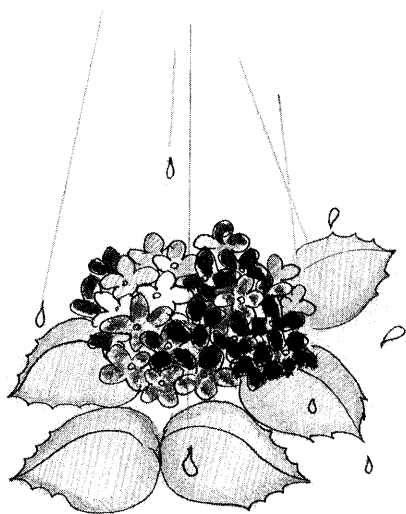
〈授乳の実態及び母親の意識について〉

ここでは、授乳法（母乳、混合、人工栄養）の選択及びその理由、授乳期間、規則性、授乳に関する知識・情報と情報源についての調査結果を述べ、最後に母乳・人工栄養法についての母親の意識に関して触れる。全体及び二地区の比較においてみていくことにする。

1、授乳法（母乳、人工、混合栄養）

母乳、人工栄養（母乳以外については動物乳等はみら

れず全て粉ミルクであった）、混合栄養の割合は、各々70%、7%、23%となっており、二地区とも母乳が第一位を占めるが、B地区において、より混合の割合が高く（A | 5.12%、B | 7.32%）母乳のみの割合がA地区に比べ



て低い。(A—³83.%, B—⁷57.%)つまり、B地区において粉ミルクの利用がより多い。

2、各授乳法の選択理由

母乳について——成分上の長所を挙げた者が⁹92.%, 母子の絆——¹87.%, 経済性——¹67.%(複数回答)となっている。その内主な理由としては、成分——50%、絆——14%、経済性——⁰5.%と、なっている。地区別では、経済性についてAでは90%が選択しているのに対し、Bでは⁷36.%にすぎず、A地区で人工栄養は高価であるという認識が顕著である。

人工栄養及び混合栄養について——仕事を理由とするものが70%と最も高い。母乳の分泌不足が30%、母親の疾病によるものが³13.%となっている。(複数回答)A地区で分泌不足を訴えたものは一名にすぎないが、Bでは八名にのぼる。

3、授乳期間

望ましいと考える期間の平均値は¹¹11.57か月であった。最短は7か月、最長は24か月であった。実態としても、ほぼ一年前後に集中するが、24か月も⁰11.%みられる。

4、規則性について

時間を決め規則的に与えた者は、全体の12%にすぎず、時間決め授乳の割合は低い。もともと、粉ミルク使用のより多いB地区では²19.%、Aでは²4.%と地区により開きがある。

5、授乳についての知識・情報と情報源⁽¹⁰⁾

全体では、看護婦(62%)、母親(56%)、医師(22%)となっている。地区別では、Bで母親が、Aでは看護婦が最も多く選択されている。看護婦からは授乳技術(例えば乳首の清潔など)を学んだとする者が多い。A地区での自身の母親からの情報内容としては、母乳の経済性に関するものが最も多い。

6、母乳授乳についての意識

母乳による授乳は、「自然になされるものか、学習の必要性があるか」との問いには、AとBでは全く対照的な結果が得られた。A地区では、自然——^{43.8%}、要学習——^{56.2%}であり、Bでは各々^{90.4%}、^{9.6%}となっている。実際に行った授乳法による相違は、あまりみられなかった。

7、人工栄養法についての意識

自由記述で回答を求めたところ、全体では「経済的でない」^{35%}、「家庭外で働く上での便利さ」が^{28.0%}、「成長発達の面での不安」^{14.0%}、のように整理された。地区別ではA地区で、「経済的でないこと」^{70.8%}、「労働上の便利さ」^{20.8%}となっているが、実際に混合栄養の率がより高いBでは、便利さを挙げる者が^{34.6%}で最も多い。また経済的でないとした者は^{1.9%}のみであるが、成長発達面での不安について^{26.9%}が表明している。

〈表〉

項目 地区	母乳のみの割合	情報源	母乳哺育の自然性	現金収入	粉ミルクの受容度
A	高	専門家	要学習	低	低
B	低	母親	自然	高	高

以上、授乳をめぐる実態と母親の意識についてみてきたが、これらを整理したのが前頁の表である。

粉ミルクを用いることが家計上困難であり大半が母乳を与えているA地区で、地域保健関係者の指導が行われている時、母乳は学習して与えるものとして強く意識されているようである。一方、現金収入の平均がA地区より高く、粉ミルクに対する受容度がより高いとみられるB地区では、母乳授乳は人工栄養・混合栄養に比べれば、要学習性の低いものとして位置づけられている。このように、女性の身体性や母子関係の象徴として、「自然」と捉えられる母乳授乳は、社会文化的状況の中で母親達の意識に相違をもたらすことがわかる。

同時代の農村におけるこうした相違が、今後どのような展開をみせるのか。現在のタイの産業構造は、農業人口だけから単純に比較すれば、一八六〇年代のわが国に重なる。一方で人乳化された粉ミルクは既に完成され、子ども数も減少している。今回の調査では母親のみを対

象としているが、更に各世帯、同一敷地内の家計状況や人間関係等、詳細な検討を要すると考える。

〈おわりに〉

チェンマイでの授乳についての調査は先行研究を見い出せなかった。母乳を与える母親のポスターはあるものの、研究者や行政側が、母親達の動向に呼应し、今後どのような授乳論を展開していくのか、注目していきたい。

〈注〉

- (1) 恩賜財団母子愛育会編『産育習俗資料集成』第一法規一九七五
- (2) 三野和雄『我が国における育児用粉乳の歴史』高井俊夫編『乳児栄養学』朝倉書店 一九六八
- (3) 拙稿「授乳論にあらわれた母親観の変遷」愛媛大学教育

学部紀要教育科学第三二巻 一九八六

(4) 授乳についての今日の女性達の関心や迷いは、例えば産院の方針で母乳哺育にできなかった不満や、母乳を与えなければ母親でないかのような論調への反発、といった形でも表明されている。(毎日新聞「母乳は是非か」一九八三、八月二十九日、九月四日)

(5) 松本信雄、B. Pangrot を代表とし、初年度は九名のチームが組まれた。調査期間は一九八七年八月～一九八八年三月である。

(6) Mae Pua や San Na Meng は、いくつかの村の集まりである tambon にあたる。Sankam Peng や San Sai は、更に大きな地域を指し、チェンマイを構成する 20 の区域にあたる。

(7) 予備調査として、二地区の九世帯を訪問し、最終的な質問目を決定した。授乳に関しては、経産婦のみを対象とした。Mae Pua 48 世帯 (一二三八世帯中) San Na Meng 52 世帯 (九三〇世帯中) の母親を対象としている。

(8) 結婚年齢の平均は、妻⁸ 20 歳、夫¹ 24 歳である。A 地区で妻⁶ 20 歳、夫³ 23 歳、B では妻⁹ 20 歳、夫⁷ 24 歳となっている。

(9) 医師がバンコクに集中するタイでは、農村の家族計画、保健指導は、地域のヘルスセンターの看護婦と、地域から選出され訓練を受けた V・H・V、(Village Health Volunteer) らが協力して行っている。

(10) 情報源については選択肢として、「○母親 ○姑 ○他の母親 ○医師 ○看護婦 ○助産婦 ○伝統的な治療者 ○ラジオ ○テレビ ○本や雑誌 ○学校教育 ○その他」を設けた。内容については自由記述とした。

(愛媛大学)

子どもの成長発達を促すために 必要な玩具についての考察(1)

— 西ドイツ製玩具・プレイモビルを
利用しての実践研究の報告 —

芸 術 教 育 研 究 所 お も ち や 研 究 室

89年の春、幼稚園、保育園、プレイルーム等に勤務する保育者九名を中心に、「おもちゃ研究会」が芸術教育研究所内で発足しました。

以来、玩具（西ドイツ製プレイモビル）を用いた実践研究を行い、月一回の研究会での報告を続けながら、まもなく一年を迎えようとしています。

本稿では、今後、四回にわたって、この一年間の実践研究の内容と結果を紹介してまいります。

また、そのうえで子どもの成長発達を促すために必要な玩具について、その内容と条件の検討も加えていきたいと思います。

◆ 四回のレポート内容

第一回：研究概要・実践報告Ⅰ 人形づくり、船づくりを中心

第二回：実践報告Ⅱ 船出の旅たち、動物との出会いを中心

第三回：実践報告Ⅲ 遊園地づくりとクリスマスを中心

心に

第四回：実践報告まとめ・考察、今後への提言

*

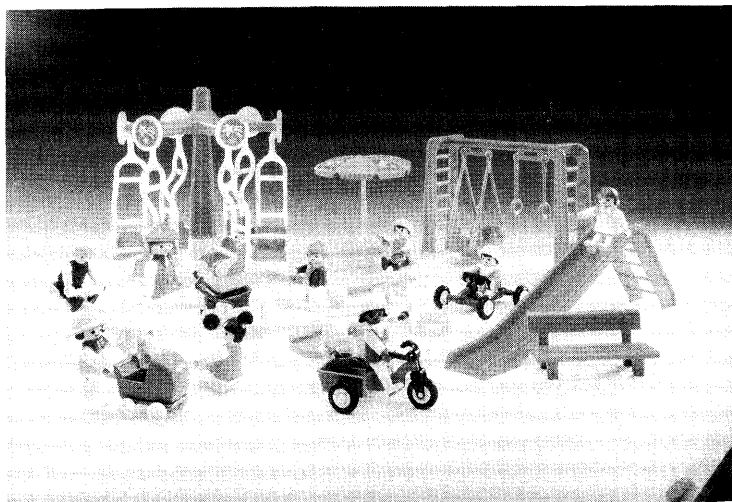
■研究の目的とねらい

幼児をとりまく保育環境の充実、中でも、玩具を望ましく与え、よりよい用い方をすることは、保育活動の幅を広げ、豊かなものとするという点で、非常に大切であるといえます。

本研究では、プレイモビル（後で説明します）という、いわゆる既製の玩具を、保育者のさまざまな働きかけによって活用しながら、子どもの成長や発達を促していきます。そのような中から、既製の玩具の有効性を考え、さらに、望ましい活用方法をさぐることを目的としています。なにしろ幼児の世界では既製玩具の活用に関する研究活動が弱いので、そこに焦点をあててみました。

■プレイモビル紹介

プレイモビルは西ドイツ製の玩具で、現在は世界八十



▲ ① プレイモビル 遊園地シリーズ

か国以上の国々で活用されています。各種のシリーズがあり、子どもたちが自由に遊びながら、生活体験を通して、創造力・表現力・社会性を身につけることが出来る



▲ ② プレイモビル 動物園シリーズ



◀ ③ プレイモビル 海賊船シリーズ

玩具として評価されています。

■テーマについて

先にあげたプレイモビルシリーズのうち、「海賊船シリーズ」「動物シリーズ」「遊園地シリーズ」を中心としながら、一年間を通して、ストーリー遊びを展開していきます。テーマは「旅」。子どもたちは、各々が創りだす、旅のストーリー遊びの中で、想像力・表現力・社会性を育てていきます。

本レポートは、その遊びの様子について、年齢別に整理し、一年間でどのような変化があるのかを考察していったものです。

◆ストーリー遊びの年間課題

五月：自分の人形をつくる

六月：船をつくる

↓実践報告Ⅰ

七～八月：船の完成と出帆（旅立ち）

九月：島の発見・動物との出会い

↓実践報告Ⅱ

十～十一月：遊園地づくり・遊園地での遊び

十二月：クリスマスの訪れ

一月：旅のおわり

↓実践報告Ⅲ

二月：思いの発表とまとめ

↓実践報告Ⅳ

この課題を手がかりに、一歳～五歳までの各年齢に応じた具体例を保育者が考えつつ、実践を展開していきました。

■実践を行った保育機関と対象となった子ども

年齢 人数 保育機関 （担当保育者）

一歳児（約六名）：妙福寺保育園（串田）

二歳児（約十名）：妙福寺保育園（小泉）

〃（約十七名）：文京幼稚園プレイルーム（奥村）

二歳児（約十七名）…あすなろ保育園（川辺）

三歳児（約十五名）…日の丸保育園（佐藤）

四歳児（約二十七名）…東江幼稚園（富田）

〃（約二十三名）…春光幼稚園（田中）

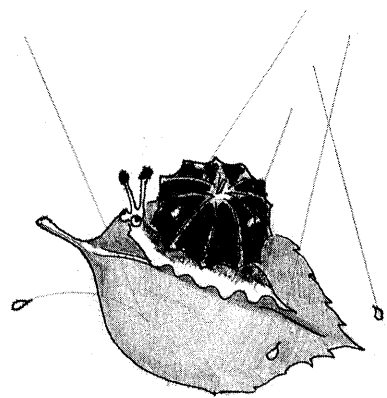
五歳児（約二十八名）…昭和幼稚園（阿部）

一〜三歳児（約八名）…（複合）…株ヤクルト・市川託
児所（中込）

◆実践報告◆

〈五月…自分の分身である人形をつくらう〉

1歳児	保育者の働きかけ	子どもの活動
○白人形を与え、ペンで柄つけをさせる。	○ペンを口にくわえたり、たたきつけてへこませたりしてしまう。 ○人形を握りしめている。	



4 歳児	3 歳児	2 歳 児
<p>○人形を配って、模様つけをさせる。</p>	<p>○子ども自身の洋服などを思い起こさせ、人形の洋服にも、模様をつけさせる。</p>	<p>○白人形を与え、ペンで柄つけをさせる。</p> <p>○子どもの好きな人形を選ばせて、シールを貼らせる。(シールは保育者が多種準備する)</p> <p>○人形に合う帽子やかごを作って与える。</p>
<p>○人形をバラバラに分解したりする。</p> <p>○人形を組み立て、さまざまな色を使って、模様を描く。</p>	<p>○二、四色の色を使って色ぬりをする。</p> <p>○人形を外へ持ち出して遊ぶ。 (遊具にのせたり、並べかえたりする)</p>	<p>○好きな色のペンを持って色つけをする。</p> <p>○自分の好きな人形とシールを選んで貼りつける。</p> <p>○着せかえごっこをして遊ぶ。</p>

〈六月……船をつくろう〉

<p>歳 児</p>	<p>1 歳 児</p>		<p>4 歳児</p>
<p>○波の様子を声と体で表現させてから、保育者が完成した船を出す。</p> <p>○青いシートの上に保育者が完成した船をのせる。</p>	<p>○保育者が船をつくるところを見せたい、二週間ほど展示する。</p>	<p>保育者の働きかけ</p>	<p>○人形に好きな名前をつけさせる。</p>
<p>○波の表現と船の登場を喜ぶ。</p> <p>○船に人形をのせたり、食べ物（画用紙でつくったもの）を積んだりして、走らせる。</p>	<p>○保育者が作っている様子を見るが、すぐ他のことに興味をうつす。</p> <p>○人形を船にのせたり、船をひっぱったりする。</p>	<p>子どもの活動</p>	<p>○自分と人形・人形と人形などで話しかけながら遊ぶ。</p>

4 歳 児	3 歳 児	2
<p>○完成絵を見せながら、船の組み立てを促す。</p> <p>○木片でつくった船と人形を組み合わせて遊ばせる。すずらんテープを使っての川づくりもさせる。</p>	<p>○身近にある木片で船をつくらせる。(ボンドで接着したり、くぎをうって組み立てたりして、マジックで着色する。)</p> <p>○パッケージの船の完成絵を見せ、子どもの前で、最初だけ組み立てる。(続きは保母がつくっておく)</p>	<p>○子どもに、もう一つの船の組み立てを促す。</p>
<p>○作り方のプリントや完成品を見くらべながら、部品を組み合わせて、完成させる。</p>	<p>○わからないところを保育者に補助してもらいながら、工夫して木片の組み合わせを楽しむ(写真④)</p> <p>○保母が組み立てる様子をじっと見つめ、部品をさわったりしながら参加する。短時間で他のことに興味をうつす。</p>	<p>○船の組み立てに参加するが、二十分程度で半数以上の子どもが他に興味をうつす。</p>



▲④ 木片を使っての船づくり。マジックを使って着色する4歳児。

- ▼⑥ いよいよ、プレイモビルの船づくり開始!!
細かい組み立て作業に熱がはいる



5 歳児

○地図を貼り、『船のはじまり』などの本を読んで聞かせる。「マルコポーロの冒険」の紙芝居を見せたり、昔の船の活躍の様子を話す。

○興味深く話をきいている。本を貸してほしいという子もいる。



▲ ⑤ 「すずらんテープの川」をつくって遊びを広げる。

5 歳 児

○宝さがしの歌をうたう。

○大型ブロックで船づくりをする。

○部品に番号をつけ、袋に入れて配布。
クラス全員が流れ作業で、組み立てていく。

○歌と動作を楽しみ、盛り上がる。

○机をうらがえして船底とし、ブロックを組み立てて帆をはり、大きな船をつくる。全員がかわるがわる乗り込み、船長になり、魚つりをしたり、役を決めて、遊ぶ。

(写真⑥)

○帆と糸の部品以外は、子どもの手によって組み立てを分担。出来上がると大喜びで、人形を乗せたり、小物を乗せたりして遊ぶ。

ぐっと細くなった。担任も何とかして飛び箱を飛ばせたいと指導してくれた。そして、やっと飛べる様になった。一つできると自信というのはすごいもので、学校にあった一番高い飛び箱まで、とんとん飛べる様になってしまった。その時の体育の成績が4。この時は、うれしかった。努力してできるようになったことが評価されたのだから。

通信簿というものは、不思議なものである。なければいいと思うこともあるし、なければ物足りない気もある。今の通信簿のあり方についていろいろ言われるが、ここで通信簿の是非やあり方などを述べようなどとは思っていない。私がどうこう言うには、大きすぎる問題だ。だが、我が家の娘が入学して二年たち、通信簿をめぐっての様子をここへ記そうと思う。

〈初めての通信簿〉

一年生に入学した時は、そのうち学校へ行くのがいやだと言いだすのではないかと心配していた。どうしてか

と云えば、娘は机に向かっているより、外で遊んでいることが好きだし、与えられたことをするより、自分で楽しいことを見つけていくことが上手な人だから、学校というものが、かなり苦痛であろうと思われたのだった。

心配は二週間程で現実になった。発熱で休んでから、行きたくないが始まったのだ。保育園の時にも一度やっていたので、まあ好きだけ休めばいいと思うことにした。そうは言っても、このままずっと休むのかなとも思うので、父親も私もいろいろ考えた。勉強は私が教えてもいいのだが、学校は勉強だけではない。自分の小学校時代を思い出してみると、友だち、上級生、先生、給食や用務のおじさん、おばさんの顔が浮かぶ。そんな人とのつながりは、家で私と二人で勉強しては得られないものだ。勉強にしても、ひとりで考えることも大事だが、友だちとやりとりしながら学んでいく事の意味は、とても大きい。娘は与えられた勉強を楽しむ方ではないと思うが、それ以外の部分では楽しいことをたくさん見つけられると思った。娘にも、夏休みまでには楽しいこ

とがたくさん見つけられると思うから頑張ってみよう、夏休みになって、まだ学校へ行きたくないようなら、その時また考えようと伝えた。先生も心配して下さって娘へお手紙を下さった。ちょうど遠足というきっかけもあり、また学校へ行き始めた。こんな風にして始まった一学期だったので、成績がどうより夏休みまで頑張っているってほしいということで精一杯であった。通信簿のことなどまるで忘れていたし、娘は通信簿すら知らずに終業式を迎えた。「先生に何か紙をもらわなかった。」と聞くと、「もらったよ。」「これなに。」と聞くと、「知らない。」という具合であった。すでに娘の気持ちは、明日から始まる長い夏休みへ向いていた。

〈夏休み〉

夏休みを迎えるにあたり、私としてはひとつだけ心に決めていた。それは、机に向かうことだけが勉強ではないのだから、一日中遊びまわっていても何も言うまいということだった。計算カードなる物を一学期にもらって

きても、娘はほとんどやっていなかったし、本当なら毎日少しずつでもやってほしいところだったが、ここは親のこらえ時と思い、ぐつとがまんした。夏休みの四十日間は、実にゆったりとした時間の流れで充実したものだった。娘たちは、仕事と決めたごみ捨てへ行くともう外で遊び始めた。それから一日中、姉妹や友だちと、ころころと実によく遊びまわるのだった。時間と空間と友だちと三拍子そろい、それは充実した毎日であった。私も娘たちも夏休みの間にじつくりとエネルギーをたくわえ、秋からの広がり期待していた。

〈楽しさが広がる〉

二学期から三学期にかけ、娘はたくさん楽しいことを見つめ始めた。下校時には、友だちとどぶ川で遊んだり、お花摘みをしたりと、まっすぐ歩けば十分もかからずに着くのに、三十分や一時間かかって帰ってくる。あゝる時は、いくら待っていても帰ってこないの心配していたら、まったく反対方向の友だちの家を二〜三軒まわ

り、友だちをそろそろひき連れて帰ってきたこともあった。あんまり遅いとお母さんは心配なんだけどと一応伝えたが、楽しみはつぶすまいと思うことにした。先生もこのことは御存知だったが、娘に対して通学路を守るようになどと注意はおっしゃらなかったで、娘はのびのびと楽しんでた。一年生の間に、もうひとつの楽しみを見つけた。学校では縦割りそうじが行われていたのだが、その班長さんである六年生の女の子と気が合い帰る方向も同じだったので、おしゃべりしながら帰ってくるのがよくあった。ある時は、普通に帰ってくる時間を二時間過ぎても帰ってこない。まあ暗くなれば帰ってくるだろうと思ったが、あまりほっとしてもと思い、探しに行った。角を曲ったとたんに見えた二人連れ、六年生と楽しそうにおしゃべりしてくる娘だった。家での調子とはまったく違い、おっとっと、顔を合わせてはいけないと思ひ、あわててUターンした。何と、六年生の授業が終わるまで昇降口で待っていて、一緒に帰ってきたのだった。(自分がやりたいことに対しては、本当に辛抱

強いと感心する。)祭りとか、楽しい学校行事もあり、授業以外の部分で大いに楽しんだ娘であった。勉強はと言うと、相変わらず親は何も言わなかったし、本人も家で勉強することは、なかった。けれども、テストで百点がいらしいということは、しだいにわかってきた様であった。通信簿にAがいくつあるとか、Cがないとか友だちと言うようになり、通信簿をもらった時は、少し気になった様であったが、それも、その時だけのことだった。

〈親にとつての通信簿〉

我が家で通信簿がどう扱われているかというところ、私は一応ちらつとながめ、ほとんど何も言わずにしまつてしまふ。父親は、私が「通信簿をもらつてきましたけど、見ますか。」と聞くと、「いや。」と言うので見ない。二人共、通信簿には今のところあまり関心がない。なぜ関心がないかと言うと、いくつかわけがある。まず一つめに、元気に楽しく過ごせたらいいと思つている。娘はぜ

ん息があり、もう六年間も毎日薬を飲む生活をして
いる。発作がおきれば、かなり苦しい。しんどいことは、

もうたくさん。元気に楽しく過ごせればいいと思う。そ

れでも体の調子がよい時が続くと、親も欲が出てきて、

もう少しなんとかならんもんかと思うが、苦しくなると

またここへ戻るのである。二つめには、小さい時遊ぶこ

とが、大きくなった時にきつと根になると信じている。

今、勉強をやらせて成績をよくしても、その失った遊び

の時間は戻ってこない。三つめは、今成績はよくなくて

も本気になったら、きつとやると信じている。これは裏

切られるかもしれないが、今のところ私たちはそう信じ

ている。そのためには、まったく手離しにしているわけ

ではなく、基礎として学んでいてほしいことは、押さえ

たいと思っている。だから、私たち夫婦にとって通信簿

は、まあどうでもいいことなのだ。

ところで、最近気付いたことだが、(まわりのこと

は、あまり気にならない私どもなので、気付くのは大変

遅い。) こういう親は、珍しく、皆さん通信簿をかなり

熱い思いで見ているらしい。私たちが少し変わっている
のだろうか。

〈がんばる娘〉

二年生になると、娘は俄然頑張り始めた。何を頑張っ

たかというと、百冊読書、マラソン大会、読書感想文、

係の仕事、書き初めなど、賞状をもらえるものが主で

あった。やってみても賞をもらえなかったものが多い

が、やってみようという意志を持ち、行動に移したの

だった。

夏休みも自分で計画を立て、やるべきことはやった。

ラジオ体操もプールの短期講習もその意気込みたるやす

ごかった。結果はどうであれ、自分で決めたことは、

しっかりやりとげた。一学期から夏休みにかけての娘を

見て、親たちは娘の成長のすごさに感心していた。

一学期と二学期の終わりには、個人懇談があり、二回

ともまったく同じことを言われた。どんな話だったかと

いうと、誰かが牛乳をこぼしたりすると、いつの間にか

娘が行って助けてあげている、そんなやさしい面がある。学習においては、大筋は理解しているが、正確さに欠けることがネックになっている。ただ、この正確さということをとこの人に求めて、型にはめてしまうことがいいことかどうか疑問だ。やればできる人なのだから、このまま本人の成長とやる気を待ちたい。クラスで上の方ではないが、まあこのままでいいでしょうという話だった。まったく私と同じ意見であった。一学期も二期もまったく同じ内容だったことには、大変失望したが、娘のことを理解してくれている先生で助かった。

だが、こんなに成長したと親が思っているのに、先生の目には何も映らなかったのだろうか。それとも、学校という場では娘は何も変化がなかったのだろうか。先生は、通信簿の項目でしか子どもたちを見ていけないのだろうか。人と人との本当の出会いが学校ではできないのだろうか。いろいろな思いがわいてくる。娘などは、通信簿に結びつかないところで頑張っていた。通信簿なんて枠に入りきらない子が他にもきつというだろうかと思う。

〈おはしを噛み折る〉

二期期の後半は、百点が多かった。いつもは、バラバラとしかないので続けて百点を持ち帰ったのだ。ひよつとすると今度の通信簿は、どれか一こくくらい上がるかなと思った。(成績はどうでもいいと言ったが、この位の感じでは気になることもある。)私が思ったくらいだから、本人も少しは期待した部分があったと思う。ただ、私は個人懇談の先生の話で、あまり望めないことだと感じたが本人には何も伝えていなかった。

二期期の通信簿をもらってきた日、どうも娘のきげんが悪い。何やらぶつぶつ言っているのを聞いてみると、今まで自分がもらった成績で一番よかった一年生の二期の時より悪いと言って悔しがっていた。余程悔しかったらしく、昼食時には使っていたおはなしを歯で噛み折ってしまった。それは悔しそうだった。だが今の娘の状況では成績がAになるのは、むずかしい。何としてもおちよこちよいとか、ていねいさに欠ける部分が多いのだ。漢字で書きなさいと書いてあるのにひらがな

で書いたり、ちょっとした計算ミスなどが、ちよくちよくある。もつといい成績にしたいと娘が思っていた様だったので、もう少し注意して、ていねいにやるのと伝えた。三学期になってからは、先生に字がきたなくて「読めません」などと書かれることもなくやっているようだ。

考えてみれば、通信簿をよくしようとすることは、むずかしい。今の相對評価では自分が頑張っても、まわりが頑張れば成績はよくならないだろう。先生によってつけ方も違うから、担任が変わったら成績がぐっと下がったという話も聞くことがある。通信簿を少しでもよくしたいと思っている子どもたちに、何をどうしたらいいか伝えられないというもどかしさ。やはり相對評価の通信簿を少し考え直してみてもいいのではないだろうか。評価をするなら、その評価を上げたいと思う子がそれに向かつて努力できるようなあり方をしてほしい。

それにしても、たった一枚の紙が、ただの紙きれからいろいろな意味を持つようになり、私としては、複雑な

気持ちだ。できることなら、通信簿が娘の成長とやる気を育てる一助になってくれればと思う。通信簿を書いて下さる先生方はたいへんだと思うが、一喜一憂しながら見る子どもの（親もとという所が多いだろうが）気持ちを考えて書いてほしいものだ。

今、娘は学校が楽しいらしい。かぜをひきかけていると、明日の献立を見に行き、○○だから絶対食べに行かなくちゃと言ってみたり、明日は○○集会だとか、あたしは係の仕事やかげざん九九の先生役で忙しいのよとか言っている。時には、隣の席の子と髪をつかんで大げんかしたりもするらしい。勉強のことはおいといて、娘は学校という生活を楽しんでいる。

六月号、いかがでしょうか。思いがけず、研究論文が重なりましたが、豊田先生、芸術教育研究所の先生方と、現場の先生方の論文、ということで、興味深く思いました。保育の現場は、毎日毎日におわれ、なかなか、自分を振り返る時間がありません。この「幼児の教育」が、立ち止まって振り返るきっかけになれば幸いです、思っています。

先月のブロックにつづいてプレイモビルの研究。どちらも、子ども、特に男の子の大好きなおもちゃです。個人的な遊びがお話の世界と結びついたところに、子ども達は、心ひかれるのでしょうか。

この春、新しく幼稚園に入って、よこんでいるのは、子ども達ばかりではないようです。一日中、子どもとべったりという子育ての生活から解放(?)され、ほっとしているお母さんも、結構多いのではないのでしょうか。

幼稚園のクラスのお母さん方とおつき

合いして、こんな感想をもらした方々がいらっしやいました。

「子どものことを考えるより前に、自分の遊びたい気持ちを発散させることが優先しているようなママがいる。」

「自分は自分、うちはうちの方針で子育てをしている、とは思えずに、まわりの人たちからの情報にのりおくれまいと必死で、なんとかついでいこうとあがいているお母さん。若いからといってしまえばそれまでだが、子どもはふりまわされて、かわいそう。」

子どもを幼稚園に送ってから、お迎えまでの数時間、有意義にすごすのは大いに結構です。でも、この時期、子ども達はそろそろ疲れのてくる頃です。体調を整えて、まだまだ目は離せません。

若いお母さんの悩みは深刻です。幼稚園に入り、母親同士のつながりができると、ずい分気が楽になります。でも、他人の話にまどわされず、我が子を余裕をもって見る目も大切にしてほしいものです。

幼児の教育

第八十九巻 第六号

(一九九〇年六月号)

定価四一〇円(本体三九八円)

平成二年六月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三二一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 〇三一二九二七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレーベル館にお問い合わせください。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

募集中!!

フレーベル館 特別企画

●フレーベル先生
創設幼稚園150周年記念ツアー

ヨーロッパ 幼児教育視察

1990年7月29日(日)～8月11日(土) 14日間

東ドイツ・チューリンゲン地方・ロンドン・フランクフルト・ハーグ・アムステルダム・パリ



フレーベル先生生誕の家の前で



熱心に説明を聞く先生方



フレーベル先生の墓の前で

昨年のツアーより

ことしは幼児教育の父、フリードリッヒ・フレーベル先生が世界で最初の幼稚園を創設して150年目に当たります。これを記念して、教育の原点を再確認し、また東西ヨーロッパの幼児教育の現場を視察する旅です。

主な訪問地

フレーベル先生ゆかりの地
東ドイツ・チューリンゲン地方

- エルフルト
- バートブランケンブルグ
- オーベルバイスバッハ

イギリス

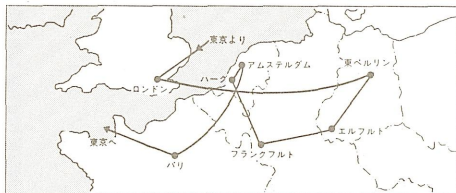
- ロンドン

オランダ

- アムステルダム ●ハーグ

フランス

- パリ



歓迎してくれた
フレーベル第2幼稚園の子どもたち

旅行期間 1990年7月29日(日)～8月11日(土) 14日間

旅行代金 815,000円 (ローンによるお支払いも可能です。)

募集人員 25名 (定員になり次第締切
らせていただきます。)

企画：キンダーブックの **フレーベル館**

旅行：日本交通公社

運輸大臣登録
一般旅行業第64号

●お問い合わせ先

フレーベル館 ヨーロッパ幼児教育視察係
東京都千代田区神田小川町3-1
〒101 電話 03.(292) 7781 (代)

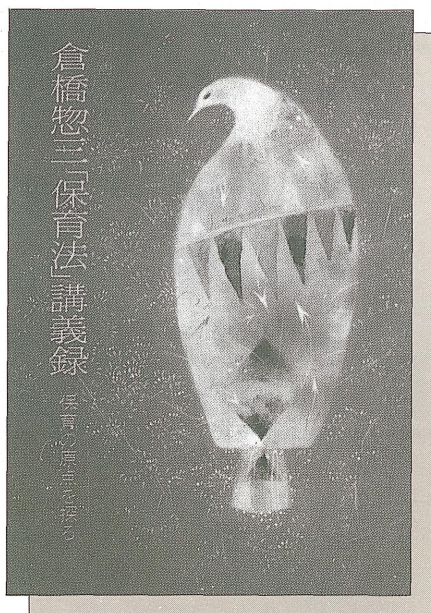
JTB団体旅行新宿支店 ヨーロッパ幼児教育視察係
(運輸大臣登録一般旅行業第64号)
東京都新宿区西新宿1-18-8 スカイビル4階
〒160 電話 03 (346) 0181 (月～金9:30～17:30)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

倉橋惣三「保育法」講義録

—保育の原点を探る—



保育の原点は、自ら育つ子どもにあるとする倉橋惣三の保育法。新幼稚園教育要領の精神の源です。



- ・昭和10年、倉橋惣三が最も円熟した時に行った保育法の講義録です。
- ・これからの子ども主体の保育への数々の提言がもりこまれています。
- ・幼稚園真諦他の著作と対照し、理解の助けとする、脚注付です。
- ・新幼稚園教育要領と関連する箇所も示されています。
- ・現代の保育にとっての倉橋理論の意義を論ずる津守先生の序文がついています。

菊池ふじの・監修 土屋とく・編

B6判・256頁・定価1,500円(本体1,456円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館